京人形を楽しむための鑑賞ガイド

雛まつりと人形

特集展示 雛まつりと人形

2022年
2月19日(土)―3月21日(月・祝)
平成知新館(1F―2)

雛人形を飾って女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われているように思われがちですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は、上巳(じょうし)の節供という三月のはじめに行われた祓(はら)いの行事です。そこでは、紙など簡素な素材で作られた人形が、穢(けが)れを引き受ける人間の形代(かたしろ)として用いられていました。それがやがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた盛大なお人形遊びである雛(ひいな)遊びと結びつき、江戸時代には、飾るための豪華な雛人形へと変化していきました。

江戸時代の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名にちなむという次郎左衛門雛、江戸で完成した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。

本年も、恒例となっている関西風の御殿雛飾りに至る雛人形の歴史を紹介するとともに、各種の京人形を展示します。また、獅子舞を演じる各種の人形と、雛飾りとともに伝えられた雛食器を集めてご覧いただきます。あわせてお楽しみください。

古式享保雛（元禄雛） 京都国立博物館蔵

雛飾りの東西

雛まつりといえば、内裏雛に三人官女、五人囃子などの人形に加え、たくさんの雛道具が幾段にも並べられた、雛段の光景が思い浮かびます。

この豪華な「段飾り」は、江戸時代の終わり、華やかな武家の雛飾りにならって、江戸（現在の東京）で完成したと言われています。江戸では、町人の女子が武家の奥向きに奉公することがありましたが、雛の節供には、近親者も屋敷の雛飾りを拝見することが許されました。大名家では、姫君の婚礼道具と文様も製作技法もまったく同じで、婚礼道具の縮小版ともいえる豪華な雛道具が見られます。このような華やかな雛道具を加えた飾り方が江戸の町人に影響を与え、「段飾り」が完成したと考えられています。

それでは京都や大坂といった上方（現在の関西地方）ではどのような飾り方が主流だったのでしょう。上方では「御殿飾り」、つまり内裏雛が住まう御殿を最上段に置くのが一般的でした。雛段は二段程度、豪華な雛道具は少なく、江戸ではまず見られないおくどさん（台所）や調理道具が加えられます。残念ながら、現代ではこの飾り方はほとんど見られなくなりました。

江戸時代の終わりに上方に生まれ、後に江戸で暮らした喜田川守貞の『近世風俗史（守貞漫稿）』によれば、上方の雛飾りは江戸よりも質素で洗練されていないように見えるけれど、これは女子に家事を習わせるためだ、と記されています。こんなところにも、実質的と言われる上方の教育方針が見え隠れするようです。

御殿飾り雛
天保 14 年（1843）頃

御殿飾り雛　天保 15 年（弘化元年・1844）頃　横山経治氏寄贈　京都国立博物館蔵

男雛と女雛
―右と左の不思議―

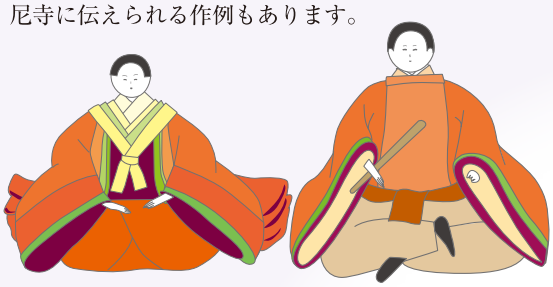
男雛と女雛の正しい並べ方はよく話題になりますが、左右両説とも根拠があり、どちらが正しいとは言えないようです。

内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本ですから、伝統的な宮中の席次に従えば、向かって右は男雛、左は女雛となります。そのため、伝統を重んじる関西地方では、現在でもこの並べ方が主流です。

しかし、明治時代を迎え、宮中に西洋式の儀礼が導入されると、それにならって男女の占める位置が逆になりました。そのため、現在の皇室の規定に従えば、向かって右は女雛、左は男雛となります。一説には、昭和天皇の即位式の際に撮影された写真を参考に、東京の人形業界が雛人形の左右を置き換えたことに端を発し、この並べ方が関東を中心に広まったと言われています。

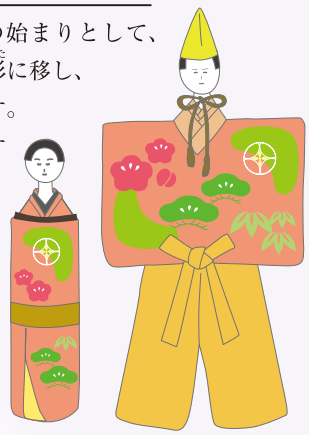
次郎左衛門雛 じろざえもんびな

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたとされる、丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとりした面貌の雛人形。18 世紀後半には製作されていたようです。大名家や、公家の子女らが入寺する門跡尼寺に伝えられる作例もあります。



立　雛 たちびな

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、人間のけがれを木や紙でできた人形（ひとがた）に移し、川や海へ流す祓（はら）いの行事があります。自立できない立雛は、けがれを移す人形から発展したと考えられ、飾ることを目的としていなかった初期の形式を伝えています。

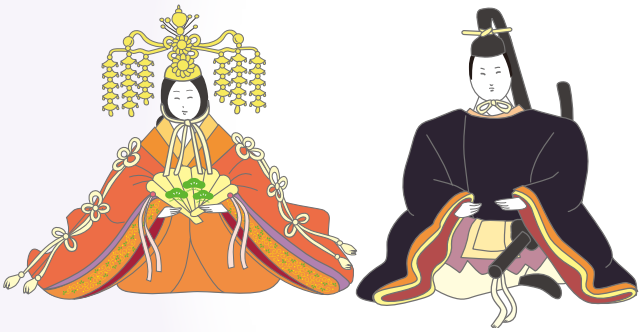


さまざまな雛人形

時代とともにさまざまに変化してきた雛人形。頭のつくりや手の動きなど、細部にご注目ください。

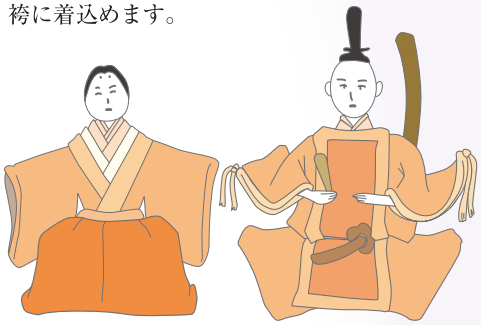
古今雛 こきんびな

江戸の名工、二代目・原舟月が大成したとされる、現在の雛人形の原形。安永年間（1772～81）からつくられ始め、江戸での流行を受けて上方でも製作されるようになりました。実際の公家装束にならうものの、女雛の袖口に刺繍を加えるなど、より豪華に仕立てられています。主に町方で飾られました。



寛永雛 かんえいびな

江戸時代前期（17 世紀）の古風な雛人形。高さは 10cm ほどで、坐雛（すわりびな）の初期の例のひとつです。男雛は頭と冠を一緒につくり、髪の毛と冠は墨塗り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を袴に着込めます。



江戸時代

[寛永年間]（1624～1643）

[元禄年間]（1688～1703）

[享保年間]（1716～1735）

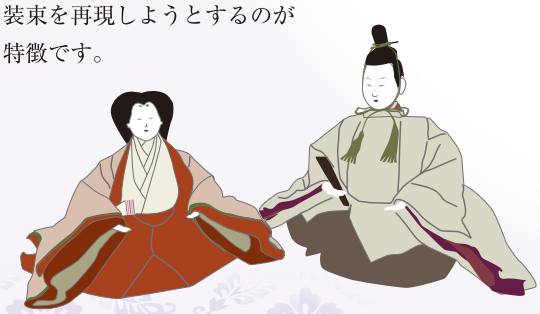
[安永年間]（1772～80）

明治時代

＊雛人形の名前についた元号は分類名称です。製作年代とは必ずしも一致しません。

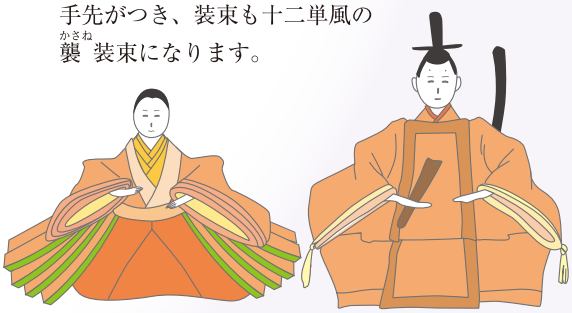
有職雛 ゆうそくびな

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のために製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中にまつわる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいいます。髪型・装束の色目・文様など、忠実に公家の装束を再現しようとするのが特徴です。



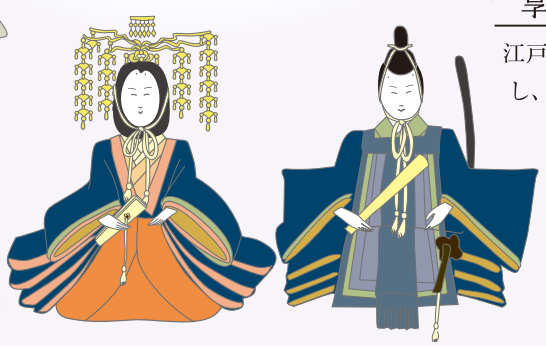
古式享保雛（元禄雛） こしききょうほびな（げんろくびな）

寛永雛よりもやや大きな雛人形。男雛のつくりは寛永雛とほとんど変わりませんが、女雛には手先がつき、装束も十二単風の襲（かさね）装束になります。



享保雛 きょうほびな

江戸時代中期（18 世紀）に町方で大流行し、その後も長くつくり続けられた雛人形。面長で端正な顔立ちで、50cm にもおよぶ大きなものもあります。毛髪は毛植えになり、公家装束を模した金襴の装束を身に着けます。



雛まつりと食器

京都国立博物館が受贈した御殿飾り雛の多くは、台所道具とともに、人形が用いるような雛食器や子ども用の小ぶりの食器が一緒に伝えられています。現代でも、雛まつりの行事食として蛤のお吸い物とちらし寿司を用意する慣習があるように、雛まつりは食文化にも及ぶ行事でした。

このたびの展示では、三つの家に伝えられた品をご覧いただきます。鮮やかな花を描く色絵、青一色で山水などを描く染付、そして黄色や緑などの釉薬を掛けた交趾風の食器が中心です。雛の食器ではありますが、幕末京都における上層町衆の暮らしぶりがうかがわれます。

子ども用食器と雛食器　御殿飾り雛附属　木村進一氏寄贈　京都国立博物館蔵

京人形いろいろ

江戸時代には、雛人形のほかにも、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。

御所人形　見立石橋　京都国立博物館蔵

御所人形 ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉（しらじし）、頭の大きなところから頭大（ずだい）、扱った人形問屋の名前から伊豆蔵（いずくら）人形などと呼ばれていました。初期には子どものあどけない仕種をうつすのみでしたが、やがて組み合わせて物語や場面を表現するようになりました。

衣裳人形　お迎え人形　入江波光コレクション
入江酉一郎氏寄贈　京都国立博物館蔵

衣裳人形 いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしいしぐさを写したものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形、能の舞台姿そのままの能人形などがあります。

賀茂人形　雀踊り　京都国立博物館蔵

賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊（つげ）を素材にした小ぶりな木彫りの人形で、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬（ちりめん）や金襴などの裂（きれ）を木目込んでいます。こまやかな刀さばきをみせる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。

※長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。

京都国立博物館　京都市東山区茶屋町 527
075-525-2473（テレホンサービス）　https://www.kyohaku.go.jp/